

私が叔父の製靴会社で働くようになったのは、戦後間もない昭和22年（1947）12月からであった。その頃の東京下町は、どこもかしこも焼け野原で、もちろん深川にあった我が家も同様に、家族8人命こそ助かったものの、住むに家無き罹災家族であった。

戦後間もないその頃、日本でどのような靴が造られていたのか、手元に残る業界資料から覗いてみたい。

昭和25年（1950）5月発行『普及版 靴のニューモード』（靴商工新聞社 オールカラー定価5百円）というものがある。

この『靴のニューモード』は、50頁ぐらい（2、3頁欠落）のものだが、製本はされておらず、抜き差し自由のカード式になっている。全部は紹介できないが、製品の多くは、アメリカの通信販売のカタログ『シアーズ』から取り込んだものが多いようである。戦後しばらくの間は、アメリカやヨーロッパの先進国の靴を、ひたすらコピーすることで、追い付け追い越せが始まったの

である。

昭和25年といえば、待ちに待った原皮の統制価格廃止に続いて、靴、鞆等の価格統制撤廃があって、業界にとっての節目の年であった。

この頃の靴は、前年にGHQ皮革担当官モントゴメリーの「日本人向けに足入れの良い靴をつくるように」という提言を受けていた。靴のニューモードNo23の紳士靴上段2足に「日本人向の試作品」という表記があるのは、そのためである。（写真1参照）

靴のニューモードNo10には、セメント式のプラットシューズも紹介されている。（写真2参照）圧着靴のプラットシューズは、日本ではまだ試作段階で、これから悪戦苦闘が始まるところであった。銀座の小売部から受けた進駐軍将校夫人の修理靴は、底はがれで、強力な「接着剤」の出現が痛感されたが、まだそんな便利なものは生まれてなかった。日本の靴産業は、戦争で10年以上は立ち遅れていたのではないだろうか。



写真1 靴のニューモードNo23



写真2 靴のニューモードNo10